

## 「わたしの平安」

聖書の箇所：ヨハネ福音書 14：25～31

### <導 入>

イエスが約束された聖霊は、イエスの復活後の50日目、つまり五旬節に下られました。今年のイースター（復活祭）は4月4日でしたので、50日目は5月23日となります。来週の「主日」（日曜日）が、今年のペンテコステ記念日です。それで、先週から聖霊の働きについて取り上げていますが、今日もそのことについてお話したいと思います。

聖書の箇所はヨハネ福音書14：25～31、タイトルは「わたし（イエス）の平安」です。緊急事態のこの時こそ、私たちは平安を持ちたいものです。

### I. 聖霊の働き

▽ヨハネ14：25、26 ここで、イエスは再び聖霊の約束を語られました。聖霊は「助け主」であって、私たちが信仰生活を送るために助けて下さるお方です。イエスは「父がわたしの名によってお遣わしになる」と言われました。「わたしの名によって」とは、「イエスに代わって」という意味があります。聖霊はイエスに代わって、父なる神様がお遣わしになります。聖霊は父なる神様と同様、肉体の目では見ることはできませんが、人格を持たれ、私たちと交わり、関係を持って下さいます。聖霊なる神様のお働きは、「あなたがたにすべてのことを教える」こと、それと「わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせる」ことです。「すべてのこと」とは、イエスというお方と神様の救いのご計画であり、「教える」とは心の目を開いて、理解力を与えられることです。私たちは、一生涯イエスご自身について学ぶ者です。イエスご自身について、すべてを学んだと言える人は誰もいません。イエスご自身を知るために、聖霊が心の目を開いて下さいます。聖書を読む時、聖霊が教えて下さらなければイエスご自身を知ることはできません。聖書のメッセージをどんなにたくさん聴いても、聖霊が神様の真理を明らかにして下さらなければ、イエスを真に知ることはできませんし、自分のものになりません。「御霊はすべてのことを、神の深みさえも探られる」とあります（Iコリント2：10）。聖霊は霊的なことに目を開かせ、イエスに関して新しい発見をさせて下さいます。この時、心がワクワクする体験をします。さらに、聖霊は「思い起こさせて」下さいます。頭で理解していた聖書の言葉も、すぐに忘れてしまいます。神様が良くして下さったことも、日常生活をするうちにその恵みの感動が消えていきます。しかし、聖霊はクリスチャンとして受けた神様の恵みを思い起こさせて下さいます。この言葉は、イエスが次に言われたことにつながります。

▽ヨハネ14：27 この約束は、イエスの遺言です。イエスはこの地上から去って行かれますが、「わたしの平安」を残しますと言われました。弟子たちは、イエスと別れなくてはならないので、きっと大変心細い思いをしていたことでしょう。聖霊は、弟子たちや私たちに、「わたしの平安」を思い起こさせられます。私たちも、信仰生活の中でしばしば平安を見失います。心配事、悩み、苦しみ、心の葛藤、信仰生活での失望などによって、私たちの心は平安を失い、落ち込んでしまいます。そのような時、聖霊は「イエスの平安」が私たちに残されていることを思い起こさせて下さいます。

## II. イエスの平安

▽「わたしは、世が与えるのと同じようには与えません」。「イエスの平安」は、世が与える平安と同じではありません。世も、私たちに平安を与えます。富によって、成功や名誉、安定した生活によって平安を見出すことがあるかもしれませんが、しかし、そのような平安はしばしば消えてなくなります。しかし、イエスが与えられる平安は、消えてなくなることはありません。イエスの与える平安は“限りのない平安”“私たちの心を守る平安”です。「わたしの平安」は、別の聖書では「心からの安心」と訳されています。風がなければ、湖はいたって静穏です。けれども少しでも風が吹くと、波が起こります。誰かが小石を投げると、穏やかな水面は乱れ、すぐに波が生じます。世が与える平安とは、そのようなものです。人生で物事が自分の思い通りに進んでいる時には、平安を見出します。しかし、物事が思い通りにいかない時、世の中の平安はすぐに消え去ります。冬になりますと、その湖に氷が張ります、しっかりとした氷が張っていれば、風がどんなに吹いても、誰かが小石を投げても、その氷は割れません。イエスの平安は、そのような平安です。イエスは「わたしの平安」と言われました。イエスは、地上の生涯で様々な困難に遭われました。またいろいろな迫害や悪口雑言に見舞われました。イエスは、「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところもありません」と言われました（マタイ8：20）。しかし、そのような状況の中でも、イエスは心の平安、休息を見出しておられました。イエスの平安は物事が思い通りにいかない時でも、苦しみや悩みに直面する時にも奪われない平安です。

▽聖書に記されている「平安」という言葉は、旧約聖書では「シャローム」であり、安全、繁栄、幸福などの多くの意味があり、それは神様からの祝福を指しています。新約聖書では「エイレーネー」というギリシャ語で、「休息」という意味があります。ピリピ4：6，7 ここには「すべての理解を超えた神の平安」とあります。詳訳聖書では「すべての理解をはるかに超える神の平和<すなわちキリストによる救いを確信した靈魂の落ち着いた静かな状態、またそれゆえに神から来るものを何も恐れず、地上でどのような状態を与えられてもそれに満足している状態、そのような平和>」と訳されています。「平安」はイエスを信じることによって与えられる平和であり、置かれている状況がどのように変わっても変わらず、満足する心の状態です。救われている喜び、クリスチャンとして生きている満足感は、日毎に増し加わり、私たちの心を守ってくれます。その喜びは、失われることはありません。▽もちろん、クリスチャンとして生きていても、イエスの平安が奪われ、救いの喜びが消えることもあります。アメリカのニューヨークタイムズ誌のベストセラー作家であるジョイス・マイヤーは、次のように述べています。「結婚して最初の数年、私は主人のデイブに対して、無理やりゴルフをやめさせようとしていました。もっと私との時間を大切にしておほしかったのです。彼にゴルフをやめさせるために、怒ったり、説得しようとしたり、できることはすべて試しましたが、どれも効果がありませんでした。そして、私はいつも不機嫌でした。彼も一時的にゴルフをやめた時期もありました。しかし不思議なもので、自分が望んでいたことが起きたにも関わらず、私には安心がなかったのです。それは、私が間違った方法で求めていたからでした。もし誰かを無理やり変えようとするれば、それはあなた自身から平安を奪うことになります」。私たちは、誰かを变えようとしてもうまくいかなくて、イライラし、平安を見失います。人を变えることは、自分にはどうにもできないことです。それをしようとするれば、私たちの心から平安がなくなります。イライラや怒り、不平不満が残るだけです。人を变えるのは、人にはできないことです。それは聖霊のお働きであり、そのために祈ることです。聖霊は、私たちの思いに静かに語られ、働きかけられます。ある人の体験です。「私が、講演会の仕事を引き受けた時のことです。当時そのような仕事の依頼は少なく、その申し出を受けようと思いました。しかし、心に平安を感じませんでした。理由はわかりませんが、なぜか心に落ち着きがなかったのです。一旦は引き受けたにもかかわ

らず、どうしても不安を感じるようになり、2週間後にお断りしました。主催者側は、その断りを承知してくれました。神様は、その時点ではまだその理由を教えてくださいませんでした。その後、私が講演会に行く日に母教会の新しい会堂がオープンしました。私はその教会の副牧師を務めており、その日は教会にいる必要があったのです」。私たちの決断が神様の思いにかなっているのか、そうでないのかを示すために、神様は心の平安を用いられることがあります。後になってその理由がわかることもあれば、一生分からない場合もあります。自分の思いを超えた神様のみむねを、聖霊は心に平安を与えることによって示されます。心に平安が来るかどうか、絶えず聖霊に聞きましょう。

### Ⅲ. イエスの平安の土台

▽イエスは、「わたしの平安」を残すと語られた後、その平安がどこからくるのかを教えられました。(1) ヨハネ14:28 イエスはご自分がこの地上を去られ、弟子たちと別れなければならないと言われました。それとともに、イエスがどこへ行くのかも語られました。それは「父のみもと」であり、そのことは喜びなのです。弟子たちとの別れは悲しみをもたらしますが、それ以上にご自分が神様のみもとにいることは喜びです。イエスの平安の土台は、私たちがイエスのもとに在ることであり、それは喜びなのです。イエスの平安は、私たちがイエスを信じて、イエスのもとに在り、イエスとともに歩んでいる中に見出されます。

(2) ヨハネ14:30 「この世を支配する者」とは、サタンのことです。サタンは、この世の支配者であり、すべての人を罪のもとに閉じ込めています。そして、神様ご自身を認めることを拒み、人々を神様に敵対させています。しかしイエスは、「彼はわたしに対して何もすることができません」と宣言されました。つまりイエスは十字架の死によってサタンに勝利することを宣言されました。イエスは復活され、罪から来る報酬である死に勝利されました。イエスは、十字架の死と復活によって罪と死に勝利されました。その動機は、私たちへの愛です。イエスの平安の土台・基礎は、罪に対する勝利とそこに現わされたイエスの愛です。

(3) ヨハネ14:31 ここには、父なる神様と子なるイエスとの関係が述べられています。父なる神様がイエスを愛しておられたので、イエスは父なる神様が言われたことを従順に行われました。その関係は、愛に基づく従順です。私たちとイエスの関係も、イエスが私たちを愛されたので、イエスについて行きます。そこに心からの平安の源があります。私たちがイエスについて行く道にはどのような状況にあっても、なくならない心からの休息と満足があります。イエスの平安の土台は、イエスとともに在り、十字架の死と復活に預かり、永遠のいのちの望みにあふれ、イエスについていく道にあります。

▽私たちが、イエスの平安を見出し、その平安に生きるために、次の二つのことが大切です。マタイ6:34 私たちは、明日のことを心配する必要はありません。「苦労はその日その日に十分あります」。いろいろと心配するのではなく、「一日、一日、着実に」イエスについて行くことです。ただイエスだけを見上げ、聖霊が教えられる通りに、今日、イエスについていくのです。もう一つは、ピリピ4:6 リビングバイブルの訳「何事も心配してはなりません。むしろ、どんなことでも祈りなさい。神様にお願いしなさい。そして、祈りに答えてくださる神様に感謝するのを忘れてはなりません。そして、すべての理解をはるかに超えた神様の平安が、あなたの心と思いをキリスト・イエスによって守ってくださいます」。聖霊は、私たちが祈ることを助けてくださいます。どんなことでも、心配し、思い悩まないで、神様に祈りましょう。このコロナの時代、聖霊が私たちの心をイエスの平安によって満たして下さるように祈ります。